

言葉の力 言葉の無力

小池 昌代

小池 昌代 / こいけ・まさよ

1959年、東京に生まれる。
津田塾大学文学部国際関係学科卒業。

詩のほか、各紙誌で書評・エッセイ等も執筆中。
また、小さな詩のパンフレット「音響家族」を11号まで発行中。
自らカットや表紙絵も描いている。

著書に、下記の詩集がある。
『水の町から歩きだして』（思潮社）
『青果祭』（思潮社）
『永遠にこないバス』（思潮社・現代詩花椿賞）
『もっとも官能的な部屋』（書肆山田・高見順賞）

「行ってらっしゃい。気を付けて」
という慣用的な文句がある。

この言葉が、たとえ毎朝交わされるとしても、言う方の立場に
立ってみれば、そこには毎回、言葉が意味するとおりの、あるいは
それ以上の、おもいと願いが込められていることだろう。平凡
な言葉だが、結局これ以外では、うまく表現できない強さがある。
一方言われた方からすれば、毎日のことだから、右から左へ軽
く流して聞いているかもしれない。受け渡されたひとつの言葉は、
荷物のようにには共有できない。おもしろいなと思う。

言葉は、各人それぞれの言語の海のなかにいったん投げ込まれ、
そこで意味付けされるのだろうか。すると同じ日本語を話してい
ても、厳密に言えば、違う質の言葉を、表面上は同じだと思いな
がら、やりとりしていることになる。

こう考えてみると、真の意味で、話しがわかる、話しを通じる、
ということは、もしかしたら、奇跡的で凄いいことなのかもしれない。
だからこそ感動があるのだろう。

そんなことを考えていて、思い出した言葉がある。高校時代の
話しである。

●

私の通っていた都立高校は、地域のなかでは進学校であり、伝
統のある良い学校としてのイメージが定着していた。しかし、そ
の入学第一日目から、私はショックを受けることになる。朝礼で、
先生や校長が壇上に立っても、誰一人聞いている者はいない。み
んなが勝手におしゃべりをしているのだ。最近、若者が人の話し
を聞かないことが、問題になっているが、二五年前にして、すで
にそうだった。実に子供っぽい態度であったと思うが、それまで、
先生の話しは、つまらなくてもおとなしく聞かべしと言われ続け
てきた私には、新鮮に見えてしまったのだった。

さて、そんなある日のこと。相変わらず騒がしい朝礼のさなか、
壇上には校長先生が立ち、挨拶の最後に、何かをさかんに繰り返
している。耳をすますとそれは

「いのちをたいせつに」

という言葉なのであった。しかし、その言葉が出た瞬間、先輩た
ちは、大声をあげて、笑い出す。これは一体どうしたことなのか。

笑われても笑われても、校長はますます大真面目になるばかり。
それを見て生徒たちは、一層、わざとらしく笑い声をあげたて。

「いのちをたいせつに」

唐突な言葉である。ばっきらぼうな言葉である。こうなっ
てから、だから、いのちをたいせつに、というのではないのだ。
校長は、前後の脈絡も関係なく、

「いのちをたいせつに」

と声をふりしぼって語るのであった。新入生の私は、その校長の、
一種、奇異な印象と笑い声に抵抗するような口調に、ショックを受
けたが、やがて、それにも慣れてしまうと、ああ、また、校長の
「いのちをたいせつに」

が始まったな、と思うようになり、おおぜいの生徒たちと同じく、
苦笑するようになっていく。

後に聞くところによると、この校長は、過去に生徒を自殺でなく
していらしい。それがどんな状況で、いつのことであったの
かは分からない。しかしとにかく、このひとはそれをまったく説
明せずに、いきなり

「いのちをたいせつに」

とくり返すのであった。

最近、なぜか、折に触れて、私は彼のことを思い出す。そして
そんな自分を自分でも不思議に思う。なぜ、あの無骨な校長の、
この平凡きわまりない言葉が気になるのか。

「いのちをたいせつに」

まるで、標語みたいな言葉ではないか。それでも、私が高校生活
を通じて、残った言葉はなにかと言えば、この校長の言葉ひとつ
くらいのものであった。

●

言葉は繰り返されるごとに、言葉自身が、予測もしていなかつ
た力をおびることになる。それは繰り返されて、呪文のような力
を自らにこめていく。これは大変不思議なことなのだけれど、長
いあいだ詩を書いていて、気付いたことのひとつである。それは
例えば、「ここで、この言葉を繰り返した方が効果的だな」という
ような、書き手の意識的な操作によってなされるわけではない。
言葉が自分自身の増殖を求めて、ふえ続けていくような感覚なのだ。



言葉はまず最初に出てきたとき、その言葉が通常使われている一般的な意味を伝えるに過ぎないが、反覆されると、意味の伝達がすでに達成されているので、別の方向へ力を発揮する。別の作用を持つようになる。三度、四度と反覆されると、それはむしろ、文字としての意味を離れ、視覚的には文様に近くなったり、聴覚的には、呪文や音楽になっていくようだ。

「いのちをたいせつに」

「いのちをたいせつに」

「いのちをたいせつに」

この言葉が、二五年近くたった今、不思議な浮遊感を持って、心の表面に浮かんできたのは、あの繰り返しの作用が、知らず知らずのうちに重石となって、この言葉を心の奥底に鎮めていたからかもしれない。

●

しかし一方で、私はこの言葉にある違和感も感じている。

校長先生は、大事な生徒を自殺によって失ったらしいのだが、その事実は、ひとつも私たちに話すことはなかった。……だから、いのちをたいせつにしない、ということは、言わなかった。この言葉の不思議さは、説明抜きで、この言葉が出ていること、つまり、この言葉が出てきた前の段階が大きく欠落していることだ。それが、標語のようなそらぞらしさや教訓的な匂いに繋がっていて、最初、いきなりこれを聞いただけでは、なんのことだが、さっぱりわからない、相手の心に届かないということになる。地面から浮いた言葉なのである。

抽象的な言葉というものは、たくさんの具体的なものを濾過した上で、そのなかから、普遍的な要素をすうっと釣り上げた言葉である。具体を振り落としているのである。しかしその抽象が生まれてきたおおもとは、多くの事実や実際がある。そこが言葉の始まりの一步なのだ。

政治家には言葉がない、という批判がなされることがある。ここに譬く言葉をしゃべるひとが少ないということだ。確かに抽象的な慣用語のオンパレードで、うわすべり。なにごとかを隠蔽するために厚化粧しているようで、退屈だったり聞き苦しいことが多い。言葉の始まりの一步を飛ばして、いきなり、理念などにい

ってしまうので、受け取る側の想像力がしぼんでしまうのだ。

「いのちをたいせつに」

校長先生の言葉の質も、どこかしら、政治家の標語に似ている。その無力さに通じるところがある。

この高校時代を通じて、私は、同級生の男子生徒を自殺によって失った。焼身自殺であった。私は彼が、自分自身に火を付けた、その瞬間を想像して、今でもあっと声をあげそうになる。

校長先生の言葉は、彼には届かなかったし、ある面では、この言葉の無力さを徹底的に証明することにもなったのだ。言葉の無力さ——私は一方で、ひとを支える言葉をはげしく希求しながら、一方でこの無力さに絶望している。

●

それにしても、生徒たちの笑いの渦のなかで、にこりとせず、頬をゆるめることなく、「いのちをたいせつに」と言い続けた校長先生は、一体どんな気持ちであったのだろうか。それをひとつの抵抗の態度と書くことは大げさだろうか。私は、あのときの校長先生を思い起こすと、ささやかながら、あの反覆を「抵抗」と呼んでもいいような気がする。滑稽な抵抗であったかもしれないが、校長先生にとって、あの表現がぎりぎりの伝達手段であったのかもしれないのだから。

このようにして考えながら、私は校長先生の言葉の源に、言葉というものの在りようを、その力と無力とを見るように思う。言葉がどのように発生してくるか、どのように人に伝わり、どのように残るか。

一生を通じて人のなかに残る言葉というのは、ごく少ないと思う。それらの言葉は、なにも格言集に出てくるようなりっぱな言葉でなく、平凡な、ありきたりな言葉かもしれないのだ。その言葉の種が、枝葉をのばすようにして、その後も人をささえ、人を内部から少しずつ変えていくとしたら、それを見てみたい。興味深いことである。

笑い声の渦のなかから浮かびあがってきた校長先生の言葉も、私の知らぬ生徒の死、そして同級生だった彼の死をまきこみながら、今後どのように、私のなかで深化していくのだろうか。

人と出会うように、モノにつまづくように、出会ったひとつの言葉である。